

物語文學概説

南 波 浩 著

ミネルヴァ書房

《著者紹介》

京都大學文學部卒業
現在 同志社大學文學部教授
立命館大學講師
著書 校異古本竹取物語

物語文學概説

昭和29年3月1日印刷 昭和29年3月5日發行

著者 南 波 浩

京都市中京區柳馬場通二條下ル

發行者 杉 田 信 夫

京都市下京區七條御所ノ内東町

印刷者 中 村 勝 治



發行所 京都市中京區 株式會社 ミネルヴァ書房
柳馬場二條下ル

電話上③7248 振替京都8076

中村印刷・昭榮堂製本 定價380圓 地方賣價390圓

は し が き

われわれ人間は何のために生きているのであろうか。これについて古今東西のすぐれた思想家たちが等しく説いているところは、人間は幸福を求めて行きているということである。アランは、「幸福になるということは、他人に對する義務である」とさえ言っている。ところが、幸福の概念については、各人それぞれちがひがあり、固定化して考えることはできない。けれども、われわれが日常目の前に見ている現實のいろいろの矛盾、不幸せなものを一つ一つ克服して行くことは、われわれの生活が一步步、幸福への道を進んでいることになるのであろう。われわれの人生の目的が幸福の追求にあるとすれば、われわれ人間の一切のいとなみは、この目的に結集されるべきだ。學問も事業もすべて人間の幸福追求のためのものであり、文學自體も決してその例外ではない。

文學は一部の階級、一部の知識人、一部の愛好者のためのものではなく、ひろく國民に愛せられ、國民の幸福追求に役立つものであるはずだ。それは國民の自由・平和・進歩・幸福へのための現下の重要な國民的課題と、眞剣に對決し、現實の不幸や矛盾を克服する勇氣と可能性とを、親しみやすい國民的形式で表現し、明日の生活への魂の糧となるような文學であつてほしい。このような文學を生み出す可能性を

追求することこそ、文學研究者の重要な課題であらう。

このような文學は創作者と研究者と享受者とのすきまのないつながりによつてこそ可能である。享受者たる國民大衆のざりざりの場における實體をつかまず、ただ高踏的な思惟と形象とを以て創作するような作者、現實の重要な國民的な課題をかえりみず、唯低俗な課題を低俗に扱つてゆく作者、否定的な論評のみをこととして問題の可能的要素を育んで行こうとしないような批評家や研究者があるとすれば、もはや新しい文學の創造に協力する資格者ではない。國民大衆の現下の切實な典型的な課題を、典型的に形象化して見せるのが創作者の任であり、そのような形象的可能性を常に掘り出して提示するのが研究者の任務である。

今日においてこのような文學があらためて要望されねばならないのは、明治以來、人間幸福の基本としての近代自我の確立をめざしながら、眞に近代社會を形成し得ず、そのためにまたわが國の近代文學が健康な發展をとげず、もろもろのゆがみをつつみ込んだまま今日に至つたためであり、しかも今日のような國民的不幸が典型的にあらわれている時、これを眞に國民全般の問題として國民全般に愛される形において追求する文學が出ないからである。

そこでそのような可能性を正しい近代精神の確立にもとめ、あるいは近代文學のゆがみを明らかにするところからとめようとするものともな行き方がある。ところがわが國の近代文學のふくむゆがみは、明

治このかただけではなく、遠く日本の歴史や文學の傳統がふくむゆがみの中から尾を引いたものが多い。たとえば詠嘆的・諦念的な日本的抒情性、非社會的な個人的沈潜性、古い社會慣習や宗教精神の中から尾を引く封建性等々、今日においてわれわれが對決をせまられているものが多い。それらのゆがみを採り出し、古人のそれに對する對決のしかた、あるいはそれへの屈服、または克服のあとを文學自体の中から明らかにし、文學の上で、否定すべきものと、發展的に攝取すべきものとを明らかにすることが「傳統と創造」の問題である。

このような意味で、日本の小説の源流にさかのぼり、わが物語文學のあとをふりかえつて見ようとするのが本書の目的であつた。

けれどもここては新しく物語文學を學ぼうとする人々、教養として古代小説のあゆみのあとを知ろうとする人々を對象として、問題點を追求してみた。したがつて、それぞれの事項について、基礎的な知識の紹介にかなりの紙幅をさき、特に註を細かくし、「參考」を附したのもそのためであつた。

しかし書き終つて感じることは當然ふれるべき作品や、繪卷などとの關係にふれ得ず舌足らずの表現の中に數々の不備を残したが、特にいわば創造への要素に多く眼をくばろうとした傾きがあり、反對に今日もなおわれわれが眞に對決しなければならぬ傳統的封建的ゆがみを、もつともつとほり下げねばならなかつたのに、それが不十分であつたように思う。ただひとえに希うところは、物語文學に關するこの一篇の

素描がささやかながらも初學者の礎石として活かされ、現代とのつながりの恢復に少しでも役立ちうること、そのためには大方の教示を得て、わたし自身のために、この書が素描としてでなく、各論的な研究にまで深まつて行く日の一日でも早くくるようにということである。

本書の成るにあつては、學生時代から薰陶下さつた恩師吉澤義則・澤瀉久孝兩博士や日本文學協會その他の諸先輩、友人諸氏の學恩に負うところ多く、特に北山茂夫さんからは常に暖い激勵に浴したことを鳴謝すると共に、それらの人々に報いるには餘りにも乏しい内容になり終つたことを愧じている。終りにこの出版を常に熱意を以て推進下つたミネルヴァ書房社長杉田さん並に社の人々に厚く謝意を表し、またかつて永い病床にあつて、文學を愛し、常によき助言者であつた亡き妻の靈にとほしい内容ながらもこの一書を捧げたい。

一九五四年一月二十四日

著 者

目次

はし
がき

第一章 物語文學考察の視點	一
---------------	---

第二章 物語文學の概念	九
-------------	---

一、物語の語義	九
---------	---

二、王朝人の物語觀	一五
-----------	----

1 『蜻蛉日記』『枕草子』における物語觀	一五
----------------------	----

2 『三寶繪詞』にあらわれた物語觀	二一
-------------------	----

3 『源氏物語』における物語觀	二三
-----------------	----

第三章 物語文學形成の社會的基盤	三五
------------------	----

一、古代後期經濟社會の風潮	三五
---------------	----

二、古代後期政治社會の風潮	四一
---------------	----

三、古代後期宗教社會の風潮	三〇
---------------	----

第四章 物語文學形成の文學的基盤	三六
------------------	----

一、萬葉集の遺風	三六
----------	----

二、漢詩文の隆昌と和歌の衰退	三七
----------------	----

三、和歌の復活と女文字の發生	三七
----------------	----

四、散文の發達とその機能	三八
--------------	----

五、かたりごとの傳統	三九
------------	----

第五章 物語文學の發生	一〇五
-------------	-----

一、竹取物語	一〇五
--------	-----

1 竹取物語の成立	一〇五
-----------	-----

2 その構想と本質	一一六
-----------	-----

二、宇津保物語	一二七
---------	-----

1 宇津保物語の成立	一二七
------------	-----

2 宇津保物語の構想とその本質	一二八
-----------------	-----

第六章 歌物語の成立……………一五

一、伊勢物語の形成過程……………一五

二、伊勢物語の本質……………一七

第七章 日記文學の歴史的意義……………一八

一、土佐日記……………一八

1 集・日記・物語……………一八

2 土佐日記の本質……………一八

二、蜻蛉日記の文學史的意義……………二〇

三、日記文學の性格……………二三

第八章 物語文學の確立……………三三

一、源氏物語……………三三

1 源氏物語の構成をめぐる諸問題……………三九

2 源氏物語の構想論點……………四三

3 源氏物語の眞髓……………四七

第九章 物語文學の展開……………三〇

1 歴史物語（榮花物語・大鏡その他）……………三六

2 説話物語（今昔物語その他）……………三六

3 軍記物語（將門記・陸奥話記・保元・平治・平家・太平記）……………三九

結 章 傳 統 と 創 造……………三三

——物語文學の傳統と新しい國民文學の創造——

物語文學研究主要文獻……………三九

第一章 物語文學考察の視點

日本文學にはいろいろの形態ジャンル(Genre)がある。しかし、今日においては日本のみならず世界のいずれの國にあつても「小説」が文學の中心ジャンルの地位を占めている。それぞれのジャンルは、それぞれの機能を持ち、存在理由をもつものであるが、「小説」は既存の諸ジャンルのもつ機能をよく綜合し、消化して、最も自由な散文の形式により、最も廣く、人生の現實を反映し、人間生活の眞實と人間の生き方を語り得るジャンルであつたからである。

その「小説」の本格的なものは、近代社會形成の途上における、近代自我の追求と確立の目的の中に發生したと考えられる。そして日本の近代小説は、明治時代に西洋近代思想の移入によつて覺醒された個我の意識と現實社會との矛盾、封建的家族制度と個我の解放との葛藤の中にはぐくまれて來たと言えよう。然しながら、日本における近代小説——小

說の本格的なものを目ざした近代小説が、その後、果して日本において順當な歩みを示し得たであろうか。この一、二年前から、識者の間において、熱心に論議されて來た新しい「國民文學」形成への提唱は、日本の近代文學が、眞に國民全般の魂の糧となり得なかつたためである。

日本近代文學の展開の跡を顧みて、そのゆがみの原因を探るには、近代日本社會の歴史的社會的解明による事が最も必要であるが、そのゆがみが、唯に近代日本の社會的ゆがみにのみ基因するとしてしまうのも近視眼的考察に陥り易い。そして又、新しい「國民文學」の形成を、近代社會の社會的文學的なゆがみの掘り下げの中からのみ求めようとするのも、せつかちな行き方と言わねばならない。

又、ある人々の間では、日本の近代文學が眞に國民的な發展をなし得なかつたのは、西洋の近代文學の正しい精神を、まづとうに受けつき得なかつたためだとも言われている。

この事實も亦輕視しがたいところであろう。然し、では西洋の近代文學精神を假りにそのまま日本に移入し、それを繼承すれば、直ちに日本に新しい近代文學なり國民文學が形成されうるであろうか。

國民文學とは、國民それぞれが、人間らしく生きたいとねがう切實な感情や希望に強くこたえ得る文學、そして明日の生活への魂の糧となる文學である。それは、現在の國民的課題に眞劍に對決し、國民に強い指針を與え、國民を鼓舞し、現實の社會的矛盾の克服と明日のよりよき生活への可能性をさぐり、それを國民的な文學形態をもつて表現する文學でなければならない。

このような文學は、やはりその根源においては、國民そのものの歴史の中から、國民的遺産を發掘し、それを媒介とし、それを次代の創造のエネルギーとする事なしに、外國からの借り物思想だけでは形成し得ないであろう。

日本の小説のよりよき發展のために、この際、さらに過去をふりかえり、日本小説の源流にさかのぼりその歴史の跡を明らかに見直してみる事は、決して迂遠の道ではなからう。ところで、桑原武夫氏は、その好著『文學入門』において、「物語」と「小説」との性格的相違を次の如く語つておられる。

⑨「物語は、日常生活をはなれた何か異常な出來事を物語るものであつて、そこでは事件にあやつられる人物よりも、事件そのものに興味を中心がおかれる。小説は、日常の世界を描くものであり、

たとえ異常な事件があつても、それは日常生活と同じ原理をもつて解し得るものとして現われている。そこでは事件そのものよりも、作中人物に重點がかかり、全体は特異な個性による世界發見という形をとる。精神についていえば、物語を支配するものは宿命觀であるのに対して、近代小説の精神は、人間が自己の運命を自ら選びとるといふ、人間中心主義といえるであらう。また作者については、物語を書く人は、異常な出來事をただ感動をもつて人に傳へんとする無性格的媒介者で、彼自身の個性は問題にならないが、小説作家は自己をもつて作中人物をつくるのであつて、そこに必ず「告白」の要素があり、小説の世界を支えるものは事件ではなく、作者の個性なのである。」

(一一二頁)

これはまことに示唆に富んだ明快な規定である。然しながら、これを我が古代後期——平安朝の中期に形成された物語文學作品にあてはめる時、ある點においては言い得て至妙なるを感じると共に、又ある點においては納得しかねる部分があり、わが平安朝の物語は、むしろ氏の所謂「物語」と「小説」との過渡的性格を示すものと想われるのである。

この意味で、日本の小説の源流を、古代後期の物語文學にまでさかのぼり、その諸性格を明らかにしたいと思う。

古代後期における物語文學の形成は、たしかに日本文學史の上に一エボックを劃した創

造であり、その元祖は『竹取物語』だといわれて來た。

然し、「物語文學」という新しいジャンルの形成は、一、二の作者の天才や靈感などによる偶發的な獨創ではない。一見、天才の獨創や自然成長の如くに見えるものも、實は、その發想においては、歴史社會での人間生活との合法的關連、そこから來る歴史社會的要求によつて生み出されるものである。新しいジャンルは、いずれの場合においても、所與の時代の社會的條件の變化に應じて、その作家の立つてゐる階級の中に新しく發生した階級的條件に伴う、さまざまな對立抗爭の段階に對應して形成されるものである。いわば作家の立つ階級の、社會的・時代的要求が、既存の文學ジャンルを止揚し、徐々に集積した量的變化の結果として發現されるものである。即ち、新しいジャンルは、時代の新しい階級的要求——新しい文學的内容が必然的に要求し形成した新しい形態である。而も新しい形態は、既存の文學的形態と無關係に、飛躍的に現われるものではなく、既存の文學遺産の手法・構成・イデオロギー等の部分的或は綜合的踏襲と、その發展の上に形成される。それは過去の遺産からの自然成長的な結果ではなく、新しい社會的要求から發する舊形態の否定的契機によつて生み出されるものである。その否定的契機をつかむことが大切

である。

従つて、新しいジャンルを考察する場合、それを生んだと見られる作家の、個性についての考察は、もとより輕視する事は許されないが、より肝要なのは、その個性や作家意識を形成せしめた作家の階級的立場と、その階級のおかれている歴史社會の諸條件を明らかにすることなしには、いかなる創造についてもその本來の意義をつかむことは出来ないであらう。新ジャンルの發生は、唯偶然的な、部分的技巧的改變の集積の結果ではなく、文學に對する具體的な新しい社會的機能についての要求に基づいているのであるから、その要求の依つて來るところの、歴史社會的根源を解き明さなければならぬ。

かくて、從來多く行われて來たような、形態面の分析のみを以てしては、新ジャンルの生れ出た發生的意義も、その本質も解き明すことは出来ない。ジャンルは作家の内的要求によつて規定される。従つて作家の内的要求の分析から始めて、その形態の解明に及ばねばならない。然し、その作業は、内容から形式へ、或は形式から内容へと、機械的方式によるものではなく、作品自體が内容と形式との有機的統一である限り、兩者の有機的關連性の上において、同時に又、外的條件が如何にジャンルを規定し、そのジャンルは如何に